

一袋ずつ叩いて固まった火薬を砕いておく。それを縦穴の中に詰め込み、信管と導火線を埋め込む。

爆破当日は、爆破技術者以外は五キロメートル以内立ち入り禁止。建物の窓ガラスは全部、外すよう命令された。一同はラーゲリで待機し、爆破開始時間の午前九時を待つ。やがて「ドーン」と鈍い音と共に地震のように室内がグラグラと一瞬、揺れた。互いに顔を見合わせて「ヤッター」と叫んだ。

爆破現場に差しかかると、昨日まで日前にあった山が跡形もなく消え去っていた。そして、そこには饅頭を二つにスッパリと切ったようにえぐり取られ、赤茶けた山肌が露出し、何か痛々しく感じた。林立していたあの松の大木のすべての枝がもぎ去られ、焼魚の串が無数に突き立てられたような山容を呈し、爆破力のいかに凄まじいかを証明していた。

労務長や爆破技術者、収容所長等は、ノルマー二〇％、予想以上の大成果であったと歓声を上げていた。使用した火薬量に対して爆破した土砂量の多寡から算定するらしく、終日ご機嫌であった。我々にとつ

て、数百トンの火薬を使った豪快な爆破作業は、後にも先にも経験しない貴重な作業であった。

以上のような経過で、タイシエットからブラーツクのバム鉄道敷設は、予定より二カ月も早く完成した。

首吊りそこないの記

岩手県 五十嵐 弥助

逮捕

終戦間もなく逮捕されて、豊原刑務所に収監されたのが九月二十五日だった。嚴重な身体検査のうえ、ぶち込まれたのは十九号の独房、そこには先任者が二人いた。

ソ連が進駐と同時に豊原刑務所は直ちに接收され、収監の日本の囚人は全部釈放され、それに代わってソ連製の戦犯容疑者、反ソ的行為者が続々ぶち込まれて

いた。

私は、戦争もしないソ連から、非戦闘員である者が捕虜になることなど予想していなかったし、ましてや戦犯容疑者として収監されることなど夢想だにもしていなかった。それはソ連を知らない甘い考えだった。

確かに私の働いていた職場は、ソ連がしきりに投入していた潜入謀者を捕らえる元縮の警察本部の特高課だったことから、たとえ私のポストが直接には無関係だとはいえ、我が身に容易ならざることがふりかかってくることを感じた。

房の先住者の一人は二十五歳の上林という青年、もう一人はオタスの森の中川というオロッコの青年だった。上林は上敷香で造材人夫をしていたとのことだったが、二週間前「反ソ行動」で既に十年の刑を言い渡されたと言っていた。

それがひどい「反ソ行動」である。スターリンの写真の載った古新聞を泥道に捨てたのをソ連の憲兵（ゲーペーウ）に見つけられ、逮捕されたというものであった。ソ軍進駐後、住民は盛んに雑役に駆り出さ

れたが、ある日彼も手弁当でそれに応じた。握り飯を食べ終わって、包んできた古新聞をポイと泥道に捨てたその古新聞にスターリン元帥が君臨していたというのだ。彼はそんな写真なんぞ全く意識していなかったのだ。憲兵に腕をつかまえられて初めて気がついたのだが、そのときは既に遅かった。有無をいわずに捕えられ、いとも簡単に十年という長期刑となったとのことである。なんたる無茶なことか。これを聞いて、まずソ連のやりかたに度肝を抜かれてしまった。

いま一人の青年中川は、上敷香の特務機関に小使として働いたことで捕らわれ未決中とのこと。オタスの森に住むオロッコの男子は、百数十人、根こそぎ逮捕されたことは聞いていたがその一人だった。先住民民族であるオロッコの人達は、オホーツク海に注ぐ幌内川の河口近くにあるオタスの森に住む遊牧民で、我が国の手厚い保護を受けて訓鹿を駆使し、狩猟をしたり幌内川に遡上するサケ、マスを獲得して平和に暮らしていたが、特務機関の工作を受け、日本軍に協力していたとする容疑らしかった。

先任者は独房での連絡方法を教えてくれた。巡回の看守兵のすきを見て床板にピッタリ耳を付けると、かすかに隣房と話ができる。隣には尾形警察部長が数日前に収容され、向かい側の房には阿部特高課長、その隣に竹内刑事課長、その北側に川口、川平警部補という具合に、谷森、新山、広島、荒川と外事警察関係者十人が既に収監されていたことが分かった。いずれも特高警察に関係する者である。

取調べ

さあそれから私の本格的取調べが始まった。終戦の年の五月上旬、ソ連の米国からの援ソ物資輸送貨物船トランスバルト号が稚内沖合で浮流機雷に触れ沈没した事件があった。乗組員五十余人が海上漂流中、本斗の漁船に救助され本斗の警察署に救護された。

当時戦争の雲行きがあやしくなり、独ソ戦で勝利をおさめたソ連の動きについては極度に警戒していた。既に日ソ中立条約を一方的に破棄通告を受けているし、少なくともソ連を刺激するがごとき取扱いは、絶対にあつてはならぬと内務省から敵達が来ていた。も

ちろんそれ位のことには百も承知していた我々は、忠実にこれを守り国賓のように取扱ひ、彼等の要望どおり、なげなしの小麦粉を都合して白パンを特製するやら、既に市中には姿を消していた豚肉だ、バターだとかき集め、待遇これつとめ、函館の領事の来島を待つて、遭難十数日後には全員を本斗港沖合でソ連の迎への船で帰してやった。

その折、私が警察部から派遣された一人として救護の一端を背負ったことが、戦犯ということになったのである。理屈はこうである。

「お前は遭難者の調査に当たって船員の住所、氏名、家族のこと、船の行動等について聞きたただただろう、それはソ連の国状偵知でスパイだ」というのである。すなわち、ソ連刑法五十八条に抵触するということである。遭難者があつたとき、氏名、状況を聞くことは当然のことではないかと言つても、そんなものは通らない。

ソ連がいかに法治国家という皮をかぶった無法国といつても、どうもそれだけで戦犯に仕立て上げるには

無理なことで、彼らは更に、「お前は共產主義者を弾圧してきた。かかる行為は反ソ行為であり、ソ連刑法の資本主義援助行為である、五十八条の犯罪だ」というのだ。

この理屈でいけば、日本の警察官は一人残らず犯罪人ということになってしまう。どうも本当の狙いは私人を戦犯と仕立て上げるのではなく、警察官幹部の総檢舉だったらしい。

それから連日連夜の追及が始まった。警察の機構、仕事の内容、同僚の氏名、その執拗さは見上げたものだった。眠る時間を与えない不眠作戦、食糧攻め、水攻めと、巧妙、残酷な拷問が二カ月も続いた。しかし、私も取調べについてはまんざら素人ではない。憲兵も、私のノラリクラーリの答弁に手を焼いていた。

もし国際法上のまともな戦犯であり、遭難船救助の際、調査に当たって遭難者を虐待したとか人道にもとる過酷な取扱いがあったのが事実であるならば、ソ連に引渡しに当たって大問題となり、ソ連は直ちに抗議したはずだが、外務省へは感謝の言葉が届いたと聞い

ていた。

私の取調調書にどんな具合に人道に反する行為として記載されていたかは、ロシア語を全く知らない私は知る由もないし読み聞かされてもない。ろくに日常会話もできない立会いの通訳が調書に署名しろと言う。二カ月にわたる長期の拷問で既に体力は限界になっていった。頭がもうろうとなっていた。裁判のとき弁解ができるからと親切げな通訳の言葉に乗って、遂に署名したのが命取りとなり、十一年間の長い間、囚人として酷使される出発点となってしまった。

昔から刑務所というところはつらいものである。鉄格子と大きな南京錠のかかった厚く黒い扉によって一切外界と隔絶され、孤独と不安、空腹と寒さ、絶望の中に終日正座を強いられる毎日は耐え難いものがあった。

壁を伝って入ってくる情報は、不安なことばかり。

特高の経歴のない木幡大泊署長も私達と前後して近くの房に入っていることがわかった。十一月になると大津長官を初め柳川内政、白井、斎藤経済第一、第二各

部長を筆頭に庁の首脳部、財界の重立った者二十数人、棟続きの房に収監されてしまった。樺太の指導的立場にあった者をごとごとく戦犯に仕立て上げようとするソ連の狙いがようやくわかってきた。

ソ連と陸地続きの国境を守る者が、ソ連の本質について、不勉強、無知について、壁伝いに尾形部長に叱られたが既に遅かった。

シベリア送り

年が明けて早々には、収監者は次々とシベリアに送られていったと壁情報があった。空いた房には次から次へと新入りが詰め込まれ常に満員になる。この頃から内地に逃げようとした密航失敗者が交じっていた。はち切れると逐次シベリア送りが繰り返された。

既に逃れ得ないところまで来てしまったと観念はしたものの、なかなかあきらめられるものではない。終戦の詔勅のあった直後、リュックサック一つで豊原駅を発った妻のこと、敗戦の混乱の中に途方に暮れているだろう肉親のことが、空腹と寒さに震えながら、なかば麻痺した脳裏を駆けめぐる。

同房のオタスの中川青年は焦げ茶色によごれた壁の大きなしみをつくづく眺めて、「あれが黒パンだったらなあ」と言ったのが今でも耳に残っている。中川青年ばかりでなく、我々も大福餅や大きな握り飯のことばかり夢に見ていた。

一日三〇〇グラムの黒パンとスープと称する塩湯を飲まされてきたので皆、骨と皮の人形のようにになっていた。胸は肋骨が一本一本数えられ洗濯板のようになっていた。おしりの肉も残り少なく骨がじかに突き当たり、床板に座るにも痛くてたまらない。目は落ちてぼんで頭だけいやに大きくなった顔は、標本室に飾ってあるがい骨人形に等しかった。

五月二十五日だったろうか、突然シベリア送りとなる。収監されたとき携行して来たリュックサックが渡された。その中には詰められるだけの衣類、身の回り品を入れてあったのだが、目ぼしいものはすべて消えていた。看守のやつらが戦利品のつもりで盗ってしまったのである。看守に抗議しても「知らない（ニジナイ）」の一語でぬかに釘である。「急げ（ベスト

レー)「早く(スカレー)」とせき立てられて引かれていく。面倒なことが起きそうになると彼らはいつでもこの手を使うのだ。彼等には常に用いる重宝な欺瞞(ぎまん)の言葉がある。「明日(ザフトラー)」と期待を持たせて、あとは知らぬ顔の半兵衛である。虚偽と欺計はソ連人の天分である。背徳が人間として唾棄すべきものであると心得ている私達は十余年にわたって平気で嘘をつき続けられたが、お前達はおめでたくできていくからだと一口に笑えるだろうか。

真岡の港から貨物船の船底に入れられた囚人は四、五百人もおったろうか。幸いにも暗闇の船底で尾形部長以下十二人、全員一かたまりになることができた。うごめく人ごみの中には内政部の幹部、鉄道、銀行の関係者、地方有力者で顔見知り合いの人もたくさんいたが、逮捕された理由等聞く自由もなく、皆自分の体を守るに精いっぱいだった。

ソ連人の囚人もたくさんいた。ソ連が進駐してからまだ九カ月足らずなのに、同国人の囚人がよくもこんなにたくさんできたものだと思議に思えてならな

かった。その中にはソ連製の「やくざ(ブラトマイ)」が交じっており、命知らずのとてもない無法者である。これが護衛兵の手先になって囚人の所持品を略奪し、巻き上げ、すり盗り、護衛者の戦勝土産の橋渡し役をやることになるのである。

護衛兵はと見ると、メダルのような勲章を胸いっぱいつけて、マンドリンのような銃は持っているもの、ひどいみすばらしさである。独ソ戦でぎりぎりの点まで戦った様子がうかがわれた。負けた日本人の服装はそれとは比較にならぬほど上等である。各人のリュックサックにはまだ身の回り品の多少はあった。護衛兵はそれをねらうのだ。もうシャツや靴下などの身の回り品なんか問題ではないとはとても言えない。厳寒のシベリア送りの身であり、お先真つ暗の立場であれば、手袋一つでも命の次の貴重品となっていた。港を出て間もなく強奪が始まる。人の顔がやつと識別できるほどの暗闇に等しい船底だから彼らのもってこいの状況である。方々から日本語の悲鳴が聞こえてくる。その方に気を取られていると、あつという間に

命の綱の配給を受けたばかりのパンが袋ごと持ち去られる。中にはリュックサックごと盗られ騒ぎ始める者もある。もう百鬼夜行である。奪った品物は護衛兵の手に、そしてその代償としてパンと煙草が「やくざ」の手に入ることになるのである。

数の上で多い日本人が、同胞の悲鳴を聞きながら助けることができないほど皆、体の方は参っていた。この無法を訴え助けを求めるすべのない囚人の姿は、話に聞いた奴隷船以上であった。

五日もかかってウラジオに引き揚げられたときは空腹と疲労でフラフラになっていた。数千人も収容されているといわれるウラジオの満員になっている大監獄に驚嘆し、ハバロフスクの赤れんがの大刑務所に投げ込まれたのは樺太を出てから一カ月もたっていた。

戦犯

赤刑務所（チョルマ）と呼ばれる三階建ての豪壮な刑務所は、政治犯（五十八条違反者）の未決囚だけを収容するソ連極東第一の刑務所で、常時五、六千人は収容されていると聞いた。樺太から一緒に送られた囚

人は既決だったので、既にいずれかの収容所（ラーゲリ）に送られたとみえ、ここに来たのは未決の警察、憲兵関係者だけになっていた。鉄の扉を何度かくぐつてぶち込まれた三階にある三十人くらい入れる雑房には、満州の警察官五人と満人、白系ロシア人が入っていた。終戦直後から入れられたが刑の言い渡しはまだと言っていた。落ちくぼんだ目玉だけがギョロギョロと光り、伸び放題のひげの顔は背筋までの寒けを覚えた。

私達十二人はこの赤れんがで四十日ほど起居したが、もう取調べは一度もなく、南京虫の大群と空腹とたたかう毎日だった。給与は樺太の刑務所時代と大同小異で、一日三〇〇グラムの黒パンと酸っぱいキャベツと青い漬物、トマトの浮いた塩湯のスープばかりで、命をやっと支える程度だった。思い出話の種も尽きて、最後はきまって食べ物話になる。大福餅、ぜんざい、ぼた餅、遂にぜんざいとお汁粉の相違をめぐって大論議に展開する始末、食物に関してはもうひげだらけな子供になっていた。

逮捕されてからちょうど十カ月目の八月十五日の朝、私達十二人は全員引き出され、長い廊下を何度も鉄の扉をくぐってがらんとした事務室のような大きな部屋に座らされた。大尉の肩章をつけた大男が現れ、同行の通訳に読み上げさせたのが私達の判決文だった。

いわく、これがモスクワからの決定通告であり、もし不服なら三日以内に上訴せよと。無茶もここまで来るとつける薬はない。裁判という形式もないから、被告の申し分を聞くわけでもないし、弁護人がつけられることもない。十年、二十年という長期刑を、あたかも立ち小便をやった者に違警罪即決令によって警察署長が料料一円也を言い渡すよりもっと簡単だ。違警罪即決令による言い渡しでも、正式裁判を受ける権利は保留されていたのに。三日以内に上訴を許すというのは全くの欺瞞で、その上訴する手段は私達にはないのだ。

言い渡された刑は次の通りであった。

「ソ連刑法第五十八条違反のかどにより、次の通り

の矯正（思想・行動の矯正）労働に処す。

十五年	警察部長	尾形半
十五年	特高課長	阿部春夫
十五年	警部	谷森一二
十五年	警部補	川口港
十年	警部	五十嵐弥助
十年	刑事課長	升内貞二郎
十年	警部補	荒川熊太郎
十年	〃	川平匡
七年	巡查部長	新山忠吉
七年	〃	広島民雄

この日の言い渡しは警察部関係の十人だった。

ここで私達の受けたソ連式戦犯なるものを書かねばならない。

第二次大戦の終末期の昭和二十年六月から八月にかけて連合国法律家代表（英・米・仏・ソ）が参加し、ロンドン会議が開かれ、さきに行なわれた（昭和十八年十月）カイロ会谈（米・英・中）で協議された日本に関する戦争責任、戦争犯罪の処理についての関係首

脳連名の宣言についての考え方を受け継いで討議され、戦争責任追及の法理として「平和に対する罪」と「人道に反する罪」が確立された。その結果が「国際軍事裁判所条例」として定められ、その法理で極東国際軍事裁判所条例がマッカーサー特別宣言で指令され東京裁判が行われた。

すなわち侵略戦争を計画準備開始し指導した者が、A級戦犯として「平和に対する罪」に問われて極東軍事法廷で裁かれ、残虐行為の命令者、実行者がそれぞれB級、C級戦犯として「人道に反する罪」に問われて犯罪行為を犯した諸国に送還されて、その国の法律によって裁かれた。

私は法律家でないからよく分からないが、戦勝国が戦敗国を一方的に侵略戦争と決めつけた上で裁判することに根本的に問題があるように思えてならない。そもそも戦争は、有史前から繰り返された人間社会の宿命にも似た非道劇であるから、戦の過程には山ほどの人道に反する行為があったらうことは想像できる。それを報復措置として摘発することはうなずけるとし

ても、戦争もしなかった我々に「資本主義幫助罪」「祖国に対する叛逆罪」というソ連国内法を適用するとは、こじつけも甚だしい。

ソ連も参加したロンドン会議の国際規定では、B、C級戦犯の犯罪は「人道に反する罪、残虐行為」であるはずだが、樺太ではソ連軍から残虐の限りを尽くされはしたが、既に手を挙げてしまった後だからソ連の捕虜一人あった訳ではなく、残虐行為等あろうはずがない。

資本主義国家の官吏としてその発展を願い忠実に勤務した行為が資本主義幫助の罪だとするならば、日本中の官吏は一人残らずソ連戦犯とならねばならないことになる。

独ソ戦におけるソ連の努力は大変なものであった。とことんまで戦った国民生活の疲弊、荒廃はとも我が国の比ではなかった。このため戦後の復興には膨大な労働力が必要であったし、更に将来予想される国際的な政治のかけひきには抑留者と戦犯が必要であったのだ。そこで世界歴史上類例を見ない人間の略奪が計

画され実行されていた。

ストリユービン

その翌日、私達は西へ向かつて旅立ったのである。もちろん行き先は誰も知らない。

囚人専用車両、囚人達はストリユービンと呼んでいた。ストリユービンは六、七十年前の帝政時代の内務大臣の名前で、当時から囚人の護送専用の列車として登場していた。革命後はおびただしい囚人の輸送に本格的に活用されていた。決して日本人の戦犯の輸送のために、にわかには作られたものではない。

この車両は九つの車室に区切られていた。四室は護送兵用であり、五室だけが囚人専用となっていた。片側が余分と思われるほどの余裕ある護衛兵見回りの通路で、五つの部屋が鉄格子に仕切られていて、中が丸見えになっている。その格子は鉄棒をななめに交差させたもので天井まで届いている。通路側は普通の窓があるが、外側からななめの鉄格子がはめてある。囚人用車室には窓がない。あるのはやはり格子のはまった小窓が一つあるのみ。

五つの部屋ごとの入り口は、不必要と思われるほど頑丈な鉄の扉に大きな黒い錠前がかかっている。いてみれば、ものすごい鉄の唐丸かごである。各室は三段となっており、下段は六人くらいが座ることができ、二段、三段にはそれぞれ五人くらいずつ横になれる。十五、六人が定員というところだろう。しかし二段、三段は低いので背をまるめてやっと座ることができる。この部屋に二十六人も詰め込むのだからたまらない。生きている人間だから少しでも楽な姿勢になりたい。囚人はソ連人、満人、鮮人の混成だから譲り合うような美德は少ない。互いに折り重なって四方から人間の体と足にはさまれ身動きもできない。

ストリユービン旅行には、出発前七日分の黒パンと塩蔵の川魚が渡された。車中ではスープの給与がないからパンの量はちょっとばかり多いようだった。もちろんその量は命をつなぐに必要な限界である。七日分で三キロもあつたらうか。これまでこんな大きなパンを手にしたことはないわけだが、これを七日分に分け、更にそれを朝、昼、夕の三つに等分するには大変

である。高等数学で解いてもその答えは出てこない。うっかり計算を間違えば最後の方は絶食ということになる。

車中での給与は水だけである。一日三度と定められ、食事時になるとバケツで鉄格子の小窓からクルンカ（アルミのコップ）で一人一杯ずつの配給である。

誰も食器を持っていないわけだから大急ぎで次の人に渡さねばならない。副食物が塩魚だからのどが渴いて仕方がない。それに夏の暑さとすし詰めの人いきれと体温で、車中はうだる熱気である。渴きに耐えかね懇願しても護衛兵は規則で一日三度だと、てんで相手にしない。それには彼らなりの理由があるのだ。水を余分に飲ませると小便の方がうるさいからだ。

用便は、大は朝一回、小は正午と夜十時と決まっている。それ以外は絶対に許さない。健康な者でも一日三回と決められたら大変である。体が衰弱すると病的に尿を催すものである。これを辛抱することは正に塗炭の苦しみとなる。鉄格子にしがみついて護衛兵に懇願する叫び声は次第に呻き声になってくる。ついに止

むなく履いている靴に大切に保存せねばならぬことになる。それ以外の方法では満員の他の客人に大迷惑をかけることになるからである。

大の方は小の方より耐久力があるが、それも限度がある。限度を越えればこれまた止むなく帽子等に受けることになる。保存した品物は、用便の時に捨てることになるのだが靴はもちろん捨てるわけにはいかない。素足ではこの先、生きてはいけなからである。帽子は護衛兵が捨てさせない。帽子なしでは囚人護送はできない規則になっているのだ。中身は捨てて洗えと言う。しかし水はない。止むなく中身を捨てただけで頭へのつけることになる。既に人間と非人間の境界が取り外されてしまっていた。

出発して二日目の朝、一番奥から四、五人ずつ荷物を全部持って通路に引き出されている。身体検査、所持品検査である。これまで何度も繰り返し繰り返しやられてきたから、危険物や禁制品など持っているはずがないのだから別には別にあるのだ。それは検査でなく所持品の略奪手段なのである。護衛兵は我々の身の

回り品を欲しくてたまらないのだ。五人の所持品を一遍に通路に広げてばらばらにして、さあ次の番だ。「急げ」「早く」とせきたてて元の房に押し込むのだ。

そのどさくさまぎれに、ねらいの品物を手際よくせしめてしまうのだ。房に戻って調べると、シャツ、手袋、靴下等が足りないことに気がつくのだが既におそく、もはや取り戻す方法はないのだ。この兵隊達は、終戦時に戦利品を漁る機会に恵まれなかったのかもしれない。

その検査の様子をそばでじっと見ている将校がいる。それが曲者なのだ。所持品の小物でなく、もっと素晴らしい囚人の着ている服、はいている靴、シャツである。将校はじっとにらんで目星をつけているのだ。これからの芝居が見ものなのだ。

夕方になったら房の入れ替えが始まった。折り重なるように詰め込まれ、横にもなれないから少し余裕をと、仏心を出したのかと思ったら、さにあらず、三人だけの入れ替えであった。新入りの人相はと見ると無気味な鼻の曲がったゴリラのような面構えで、ランニ

ングシャツ一枚しか身につけていないブラトマイと呼ばれるロスの若者である。頑丈な首筋、入れ墨のあるたくましい胸は、監獄で衰弱したことなど一度もないような姿である。入って来るなり甲高い罵声、無遠慮な振る舞い、傍若無人な態度には、一同はいっぺんに威圧されてしまう。間もなく行動開始である。片っ端から私物の袋を開け、囚人ポケットに手突っ込み始める。まるで自分のポケットに手突っ込むようなふてぶてしさである。

被害者になる房内の囚人が二十数人もいるのだから、力を合わせれば、わずか三人のブラトマイだから何とかなるだろうと思うのだが、意思の疎通のない、言葉も通じない混成の囚人の上、皆体力は極端に衰弱している者ばかりで、我が身を守るに精いっぱいなのだ。命知らずの無頼漢のためにこんなところで命を落とすには余りにも無念である。

無頼漢は着ている服、外套、靴を売れという。金があるはずがないではないかの言葉に対し、護衛兵に頼んで買ってもらい、パン、煙草に代えてやるし、その

代わりの被服も持つてくるという。廊下でやった先刻の身体検査の折じつと見ていた将校の回し者であることが誰の目から見ても明瞭である。将校は、この国でも、囚人からただで強奪したのでは、後日問題にされ自らの破滅になることをおそれているらしい。代償を与えて買い取ったことにしておけば問題にならないらしい。恐るべき合意である。囚人たちは、どうせいつかははぎ取られるものなら、今のうちにパンや煙草にした方がよいという気になってしまう。

それにしても、もし腕力による抵抗が不可能だったら、どうして犠牲者は訴え出ないのだろうか。通路からは鉄格子越しに房内は何もかも手にとるように見え聞こえているではないか。銃を持った護衛兵はゆっくりに行ったり来たりしているのに、被害者の悲しげな声もちゃんと聞こえているのに。たった一メートルしか離れていない薄暗い車室の洞窟の中で、人間が略奪されているのに護衛兵は知らぬ顔である。間もなく、あきらめた数人の囚人に、外套やシャツの代償に大きなパンやマホルカ（やに煙草）が鉄格子の小窓から入れ

られた。

とにかく護送隊の兵は、将校も下士官もろくな物は持っていない。持っている物といえはマンドリン型の銃と飯盒、それに配給食糧だけである。従って囚人の立派な服、外套、牛皮の長靴、文明社会の品々を見ては戦勝国の軍人としてたまらないのか、それともこうした役得が長年黙認されてきたこの国の体質なのか、ソ連の囚人達はあきらめ顔で案外騒がないところを見ると、後者であるらしい。

空腹と渇き、極端な排便の制限、横になることも出来ないすし詰め動物以下の乱暴な取扱いは、どんなに丈夫な人間でも、そう何日も耐えられるものではない。ましてや一年近くも未決監獄でいためつけられた体では極限である。

囚人は死なしてしまえば困るのである。この国の科刑目的は、罪の償いや社会復帰のための遷善というようなものよりも、囚人を最も安価な労働力として活用するのが先行しているからである。護送兵の責任は、何はともあれ殺さずに目的地に届けることが必要なの

だ。従って、それには七日くらいが限度で、それ以上の行程では国家目的に沿わないことになるのである。

別れ

クラスノヤルスクは、東部シベリアの大きな街である。北極海に注ぐ大河エニセイ河は、この街でシベリア鉄道と交差している。

九月も末となり、小寒い風が吹き始めていた。私達は、ハバロフスクから三千キロ西のここまで着くのに四十日もかかっていた。途中、バイカル湖の近くにあるイルクーツクや名も知らない鉄道沿線にある中継監獄に何回か泊まってきたからである。ここにたどり着いたときは、護送兵の略奪、ソ連囚人の泥棒から免れた持ち物もほとんどなく、空腹を満たすため外套も服も靴もパンとやに煙草と交換したこともあって、すっかりもとの姿は失っていた。朝晩の冷え込みは、やせ細った背筋を突き刺すようであった。

エニセイ河の支流であろうか、川沿いの丘伝いに建っている無数のバラックが、この中継監獄であった。要所要所に監視の望楼が一段と高く起立してお

り、有刺鉄線が幾重にも取り巻いていた。

当時ここに収容されていた囚人は、一万五、六〇〇〇人といわれていた。ここでソ連の囚人の数について書かなければならない。帰国後であるが、一九四七年末か四八年の春かに、ソ連の国営新聞イズベスチャに次のような記事が載ったことを聞いた。「アメリカの新聞記者がソ連人に対し、ソ連には三〇〇〇万人の囚人がいるそうだが事実かと質問したが、そのような事実はあろうはずはない、こんな質問はソ連を誹謗する悪質な宣伝である」と懸命になって弁解したことがある。しかし、世界の常識や一般ソ連人の常識では、ソ連の総人口二億四、五〇〇〇万人に対し囚人数は三〇〇〇万人前後であるということになっている。更に例のウクライナの粛清を始めたため、一九四八年から四九年にかけては三二〇〇万人から三五〇〇万人に膨張したと言われている。

しかもソ連の囚人は、刑期が十年、二十年が普通で、五年以下などほとんどない。囚人同士ラーゲリで「お前の刑期は何年だ」との質問に対して「七年だ」

という返事があつたら「お前は少ない（ジベ、マール）」と驚きの言葉が出ていたから、その後幾度か政策の変更があつたとはいへ、今なお膨大な囚人が監獄にラーゲリにうごめいていることは大体間違いないと思う。

この中継監獄は、いよいよこれから矯正労働所（ラーゲリ）に振り分けられる奴隷の市場となつていた。

囚人の服装は千差万別で、日本なら乞食でさえ顔をそむけるようなほろをわずかにまとう者、そうかと思ふとキリッとしたまともな服を着ている者、こんな者は極めて少ないが、親戚から最近差入れがあつたか逮捕されてまだ日浅い者だろう。略奪を免れてよくここまで来たものだと思ふ。

年齢はと見ると、十二、三歳のチンピラからヨボヨボの老人、人種は確かめるすべはないがソ連人が最も多く、満人、鮮人、日本人の黄色人種、ポーランド人、ドイツ人と思われる北欧人、頬骨の出っ張っている蒙古系らしい者、写真で見たことのあるカザック系

の者と、まるで人種の市場である。戦傷者と思われる手、足のない体が不自由な人の多いのは特に痛々しく見えた。

女囚は、有刺鉄線で一応囲われている別棟にこぼれるようになってうごめいていた。

ただ共通している点は、くぼんだ目を陰うつに光らせながら屠場に引かれる日を待ち、おののくように空腹と寒さに震えていることである。絶望のうちに喘ぐこの大群は既に人間の粹を外している。生きるためのけんか、かっぱらい、強奪が、何十ホーンを超える騒音の中に繰り返されていた。これが、本当の弱肉強食の無秩序の姿である。

この姿を手にとるように承知している獄吏は全く無関心で、ただ有刺鉄線の外へはネズミ一匹逃がすまいと厳重きわまる警戒を続けているのだった。

幸い私達は、皆一かたまりになって三〇〇人ほど入れるバラックにロスと一緒にぶち込まれた。全く窓のない物置きのようなバラックで、中には土間の上に二段に仕切った寝る席が戸棚のように三列に造られてい

た。とても人間が住める状態ではない。私達は一番奥の戸棚を選んでやつと横になった。

翌日になったら、私達一行の来所を知った同輩が集まって来た。ここの人間市場のバラックには錠がなく、各バラックの出入りは自由だった。

いまだ記憶に残っている人達の名前を書いてみよう。

前警務課長	山本 市太郎
前落合署長	上野 宇宙
落合町長	緒方 至
恵須取署警部	宮島 健三
大泊署長	木幡 完
元警防課長	春田 長作
元真岡署長	増水 勘助
元警視	長谷川 四良
民間の方では	
落合王子工場長	山本 勝
敷香 商人	吉田 辰二郎
留多加町洋品商	柏 政三郎

その外、憲兵隊関係の白浜中佐、奥田少佐、吉田、岡田両中尉、伊原少尉の面々であった。

ここでは逮捕された事由、言い渡された刑期等は話題にすらならなかった。みな話にもならない程、ばかげた資本主義幫助という犯罪でいづれも十年以上であつた。

わずか一年前までさつそうと肩をいからしていた妾とは、なんとという変わりようであろう。もう愚痴を言つても始まらない。敗戦と同時に何もかもご破算なのだ。それよりも今は、囚人間に囁かれているこれからナリリスク送りになるらしい噂におびえていた。

このナリリスクは、ここからエニセイ河を約二十日ほど下って到着する北方二百キロメートル、即ち北極海に面したドジンカという街の近くで、この地域一帯は、ブラチナ、ニッケル、銅、石炭、黒鉛から金、銀に至るまで、ここで産出しないものはないといわれる宝の山であるが、永久凍土の大氷原である。北緯七〇度に近いこの地域は、人間がまともに住めるわけがなく、いかに高給を約束されたソ連人でも自発的に出

稼ぎする者はいない。従って囚人によって開発する以外はないのである。囚人はナリリスク行きと聞いただけで絶望的呻き声をあげていた。ナリリスクに引かれて行った者で生きて娑婆に帰れる者は殆どなく、幸い生きて戻ったとしても、まともな体ではなくなってしまうからである。

クラスノヤルスクに着いて三日目から身体検査が始まった。医務室と称する部屋はバラックの一隅を区切ったガランとした部屋で、テーブルを幾つも並べて、医師と思われる軍服姿の脂ぎった赤ら顔のロスが三人一組になってずらりと座っている。裸にした囚人を長蛇のように並べ、次から次へと診断し体位の等級を決めていくのである。その速いこと、一人一、二分のスピードである。手足が満足についているかどうかを見て、あとは後ろ向けにしてしりの皮を引っ張って見るだけである。しりの皮が著しくたるんでいるかどうか、その程度が判断のかぎになっていた。細くなってしまうた首に支えられた頭は、危なっかしいほど大きく、胸は洗濯板のように肋骨の溝がくぼんでいる。

うす暗い医務室に並ぶ囚人の顔色は結核の末期症状にも似て、閻魔大王の前で裁きを受けている亡者のごとく、お寺に掛けてある地獄絵そのままであった。

元来やせ型の私は、当時すごくやせ細ってしまった、骨が邪魔になってこれ以上はやせられないほどだった。おしりの皮のたるみも著しかった。第四級の重労働不適の判定を受けた。

これには事由がある。豊原の刑務所時代、空腹に耐えかね、使役に出された同房の友に頼んでこっそり炊事場から岩塩を運んでもらった。それを水にとかし黒パンをふやかして一時の満腹感を得るため十日間もガブガブ飲み続けた。これが原因で腎臓をやられ次第に小便の出が悪くなり、土左衛門のように膨れ上がったしまった。内臓がすっかり圧迫されて呼吸が困難になり、横になることもできなくなってしまった。監獄の女医はもう助からないと判断したのだ。

ソ連では、重症患者の囚人に希望食というものを許して真上への土産を与える温かい制度がある。私はそれを許された。私は砂糖と煙草を申し出た。私はそん

な状態になっても自分では死ぬなどとはちっとも考えなかったが、同房の友は「かわいそうに、五十嵐も終わりか」と涙を流していた。病室代わりの独房に移されて、うめき通したが、奇跡的に持ち直したのである。そのとき私はまだ三十三歳の若さであったし、生命力があったのだ。しかし獄内の給与ではもとの体に快復するはずはなく、数カ月後の身体検査のときも骸骨の標本のようになっていた。

それが北氷洋行きを免れる原因になり、十一年後生還できた第一歩になろうとは、人間万事塞翁が馬である。

この日、生と死と確然と決定されたのである。即ち、北方送りと中央アジア送りとに区別されたからである。幸いに後者行きとなったのは、小柄で年配の尾形部長と、既に頭髪の真っ白になっていた谷森、吉田老人、それに骨皮の私で、二―三〇〇人の小部隊に分けられた。かくして膨大な囚人が、しりの皮のたるみ程度に従って、北へ西へと引かれ行き、そして後続の部隊を受入れることを繰り返していくのであった。

これで一切合財が終わった。別れの言葉を交わす余裕もなく、こうして別れた友は遂にほとんど帰らなかった。

川口警部補は一番元気があった。内地に帰ったら、まず喉がつかえるほど白い飯を食べ、尻穴から煙が出るほど煙草をのむんだと口癖のように言っていた。誰もが、このまま死んでなるものか、どんなことがあっても生き抜くのだと言い交わしてここまで来たのだが……。ハバロフスクで刑期を言い渡されたとき、川口は、警部補なのに一番重く、部課長並みの十五年と聞いたときは非常なショックを受けたようだった。「刑期等問題ではない。政策上の犠牲であるし、日本国がなくなつた訳ではないから必ず救い出してくれるのだ」と何度も何度も尾形部長から諭されていたが、やや自棄的になっていた彼は、持ち物、着ているもの、履いている靴を進んで次から次へとパンと煙草にかえてしまい、一番ひどい姿になってしまっていた。あれから嚴寒を迎えて、一番早く倒れる原因になったのかもしれない。

永遠に解けない北氷洋の一角に、言い遣し伝え聞かすすべもなく倒れた友の恨みもまた永遠に解けないであらう。

矯正収容所（ラーゲリ）

間もなく、例のように一週間分のパンと塩魚を渡されてストリユーピン列車に詰め込まれた。

物事は度重ねると慣れるということがあるけれども、ストリユーピン列車の苦しみは楽になるというしろものではない。極限の苦しみは一層ひどくなる。それは体力が一層衰弱していたせいもあつただろう。しかし今度の一行は、大部分が老人と病弱者だったので車内はこれまでよりは静かだった。

クラスノヤルスタからペトロバウロフスタまで一八〇〇キロあるが、途中、ノボシビルスタや町名も定かでない中継監獄で下車休養を与えられた。どこも満員で、支給されるパンの量もスーブの塩かげんも房の仕組みも錠の大ききまでどこも同じで、規格が一定だった。すべてのものが規格の国である。

ノボシビルスタ中継監獄は駅からちよつと距離があ

り、歩いて二十分もかかったらうか。途中、日本軍の捕虜がもとの軍服姿で多数木材の運搬をしている姿を見た。もちろん銃剣の監視のもとでの作業だろうが、青空の下で、しかも言葉の通ずる同胞と共に働ける姿は実にうらやましかった。

これまで一年間、青空の下で存分に手足を伸ばしたこともなく、暗がりの洞窟のような房の中に言葉も通じない亡者と一緒に詰め込まれ、支給された黒パンの盗難防止と南京虫つぶしにばかり神経をすり減らしてきた者にとっては、どんなに苦しくとも同胞と一緒に大を出し、思い切り手足を動かすことのできる様子が、大げさに言えば天国のように見えた。

ペトロバウロフスタはシベリア鉄道と中央アジア地区への分岐点で大きな古都である。護送兵と警察人に追い立てられての二十分間の徒歩だから観察する余裕もなかったが、町並みは落ち着いた静かな街のようだった。

ペトロバウロフスタから南方のカザック共和国は、無人の原野に等しい未開の広野が果てしなく続く。

カザック共和国の首都カラカンドはベトロパウロフスクから南方五〇六〇キロもあるうか、石炭の大産地だから首都らしく栄えてはいるが、そこから南西一帯は面積こそ巨大だが乾燥不毛の地である。地図で見ると、日本全土の何倍もある荒野がキルギリス大草原に続き、天山山脈の高原地帯にあるキルギス共和国に接している。

この広大な地区の緑地化が、ソ連開拓事業の重要課題となっていた。不毛のこの地方は遊牧の民がチラホラと暮らしているだけで、普通の人間は進んで住むところではないので、開拓の国家目的のために膨大な囚人が投入されていた。その数二〇〇万人は下るまいと言われていた。

鉱山地帯や工場地帯でないから大きなラーゲリはなく、三〇四〇〇人あるいはもっと小人数のラーゲリが点々と造られ、開拓と農作業に従事しているのだ。

いわゆる五十八条組の政治犯は少なく、一般刑法犯の者が多く、地方人も刑を勤め上げて居住制限となつた半自由人が主流となつていると聞いた。

私達が首都カラカンドから南方四〇五〇キロの大草原のど真ん中にあるカラバスという地図にもない囚人のたまり場に着いたのは十一月になつてた。乾燥しきつた北風が吹きすぎ、山一つない、木一本もない大平原をなで回していた。普通人の人家はほとんどなく、獄吏の住む掘っ立て小屋のような官舎とおぼしい建物のほかは、すべて囚人の収容所とその関連施設である。ここでも一段と高い監視の望楼と鉄条網に囲まれた平屋建てがポツン、ポツンと見えるだけである。

一〇〇メートル四方もあると思われる囲いの中にある二棟の平屋建ての収容所に、我々一列車分の囚人一五〇人が新入りとして入れられた。型のごとく氏名、年齢、適用条項、刑期の照合の後、護送兵から獄吏に引き渡される。ハバロフスクをたつて約四カ月目の十一月になつて、やっと定住の地にたどり着いたことになる。鉄条網の中は鍵のついた扉はなく柵内の行動は自由となつてた。それがこれからの苦難の原因となるのだが、そのときはホツとした気持ちになつた。

ろくな木一本生えていない大平原のまっただ中だか

ら、ここでは材木が大変な貴重品である。建物はサマ
ンと称するブロックの二倍ほどの天日で乾かした土れ
んがを積み上げた壁でできており、屋根はどろ柳の枝
を渡し、その上に泥土を上げた、すべて土まじじゅう
の家である。小さな窓が要所要所についていたが、窓
枠だけは木材を使い、青色のとれない、でこぼこのガ
ラスがはめてある。満足な一枚のものはほとんどな
く、割れたガラスを何枚も互い違いに組み合わせて
くっつけてある。年中ほとんど雨の降らない土地だか
ら、それで崩れることはないのである。

棟の大きさは二四〜五メートル四方もあろうか、衛
門に近い北側に小部屋を三つ仕切っており、医務室と
物置庫になっていた。その外は、囚人用の部屋として
ガランとした大部屋になっていた。これが一号棟で、
その南側に並んで建てられている二号棟には五メート
ル四方くらいの炊事場がついており、その隣に四〜五
人くらい寝られる小部屋が仕切られ、その外は一号棟
同様大部屋になっていた。その小部屋はコメンダント
と称する牢名主や医務室勤務の特権階級者用となつて

おり、二号棟は大体作業成績優良者がコメンダントの
指示に従って寝られるようになっていた。一般用の大
部屋の内部は丸太で二段にベッドのような形に造つ
て、上段だけに貴重品の板が敷いてあり、下段は土れ
んがを一段と高く積み上げただけである。もちろん布
団もなければ、ござ一枚あるわけでない。そこに囚人
が着の身着のまま折り重なるようにして横になるの
だ。

大部屋の中央に大きなベチカが造られてある。燃料
は乾草だけである。夕方になると使役の囚人が馬車で
運んで来る。衛門に入ってきて来ると急ににぎやかにな
る。まず炊事用の燃料が優先的に取られ、残りがベチ
カの燃料となるのであるが、囚人達は先を争ってベッ
ドのそばに運んでいく。その乾草を一夜の布団にしな
ければならないからだ。力の弱い者は乾草のない板の
上、れんがのベッドの上に足を海老のように曲げて一
夜を明かす外はないのだ。しかし、せっかく獲得した
乾草もベチカが焚き進むにつれ、はぎ取られ、夜半に
なるとそれもなくなってしまう。でも、よくしたもの

で大部屋一つに二〇〇人も収容されているので、締め切った部屋は夜半の頃までには人いきれとベチカの余熱で凍えることはなかった。

収容所の衛門や四隅にそびえ立つ望楼には強烈な照明灯が輝いているが、房の中には空き缶に石油（ケラシン）を入れ、それに燃え移らないように巧みに蓋を作り、木綿の紐が燃え続けるように作ったランプが五つ六つあるだけで、ランプのそばに来てもやっと人の顔を識別できる程度である。それが泥棒が夜中、枕探しをするのに適度の明るさである。身を守るには靴を枕にして持ち物をしっかりと抱いて寝るほかはなかった。

朝六時になると衛門の獄吏が鉄道線路の切れ端をつるした鐘をたたく。一斉起床である。すきっ腹をかかえて横になっていた囚人が一斉に炊事の小窓に殺到する。バラックの入り口近くに四斗樽二杯くらいの大きな水桶があるが、ほとんどの者は顔も洗わない。一日分のパン三五〇グラムと、スープと称する青いトマトの漬物と酸っぱいキャベツの葉の浮いた塩湯をもらう

のである。

食器の設備があるわけではないので、大部分の者は缶詰の空き缶か手製の飯盒を持っている。新入りの者や持ち合わせのない者は、食べ終わった人のよさそうなかザック人やドイツ人を拝み倒して借用し、大急ぎで飲み込むことになる。食堂、そんな人間の使う設備なんぞはこのラーゲリにはなかった。

食事はベニヤ板に書いてある名前をチェックして確かめて渡すのであるが、混雑にまぎれて二重取りする者はなかった。それは、ごまかしがばれて半死半生の制裁を受けた様子を何度も目の前で見ていたからである。

ここには紙というものがほとんどない。記帳はすべて板の切れ端で、使い終わればそれをガラスのかけらで削り消して何度も使っていた。

映画館の入場券売場のような食事受領の小窓の混雑は大変である。スープをもらうのに懸命になり、行列にはみ出ないことに気をとられていると、もらったばかりの命の次の一日分のパンがそっくりすり取られる

ことがある。年末大売出しの抽せん場のような混雑だから、手元から離れたら最後、犯人の発見はまず不可能である。

次は人員点呼である。点呼は毎日朝晩二回あるのだが、バラックのそばの広場に五人ずつ並べ一つ二つと数えては板切れに、いちいち鉛筆で書いていくのだが、計数に極めて弱い獄吏は汗だくであった。四、五〇〇人の囚人を数え終わるのに小一時間はかかる。

これが終わって作業出場の段になる。二号棟の住人は古参者、作業良好の者と、それに特権者だけだからスムーズに獄吏に引率されてさっさと衛門を出ていくが、一号棟住人の出場は大変である。

ラーゲリには、コメンダントという、日本で言えば昔の牢名主みたいな特権者がいる。元来コメンダントの意味は司令官(軍)、管理者(官庁の建物)などの意だが、囚人社会ではラーゲリ内の風紀係、取締者といった顔役の職務だが、これが囚人でありながら、強力な権力行使を与えられた大変なボスで、頑強な体力、すぐれた統率力の所有者が多い。ラーゲリ内の運

営はほとんど任せられ、炊事、配給、作業配置に至るまで彼のあごの下で回転していた。彼は特別の居室を与えられ、囚人の上前をはねた糧食で盛り上がった筋肉は脂ぎって光っていた。もちろん、かなめ、かなめには自分が居座っていた。

監獄側では、この組織を巧みに利用している。そのため、彼らによる暴力や不正行為はある程度黙認していた。囚人の生殺与奪の特権を有するこの男にいらまれたら、地獄の三丁目から更に四丁目に転落しなければならぬ。

一号棟の囚人は虚弱者が非常に多い。監獄で散々ためつけられて来た新入りが多いからかもしれない。ここは五十八条組の政治犯は割合少なく、盗み、詐欺、傷害といった普通犯の者が多いので根っからの悪者が多く、したたか者が多数交じっていた。作業になかなか出ようとしない者もある。これを有無を言わずに幾組かに分けて獄吏に渡すのも彼らの大切な任務となっていた。

作業に出張る無理からぬ理由もあった。素人が見て

も、とても働けそうもないやせ細った者や、体の不自由な者のほかに、服装が全く整っていない者が多いことである。服装が整っていないと言うと上品で一般社会に通ずる表現であるが、ここで言うのはその桁が違ふ。ポロポロの綿入れ（フハイカ）一枚でシャツも着ない裸同然の者、足巻きのポロがはみ出ている靴をわずかに足にはめている者、手袋も帽子もない者といった具合で、すごい服装である。どう考えても寒空の外で仕事などできるさまではないのだ。

バラックの中には、熱発でやっと作業休をもらった病人や、昨日到着したばかりで作業免除になっている者がいる。その者から外套、靴を取り上げて間に合わせるコメンダントの子分の腕前は見上げたものだった。

作業は農開拓に関連する道路建設、貯水池の穴掘り、堤防の土盛りを中心に、これに要する採石、それに家屋建築用の土れんがの製造運搬が主であった。

どの作業にも厳格なノルマがあり、ノルマに達しない者は減食処分となり、作業サボと認定されれば懲戒

房入りである。その反面、ノルマを超過した者にはパン一〇〇グラムないし五〇グラムの増食を与えられる。増食のパンは減食処分になった者の分を与えられそれで済むから、事は極めて簡単である。これを決定するのが三〜四〇人単位になっている班（ブルガーD）の班長（ブルガシル）で、コメンダントの配下であった。

一日三五〇グラムのパンでの重労働は命を支えるにぎりぎりである。ノルマ以下で減食となったらそれこそ大変だ。ノルマ以上の作業量を受けるには死闘である。幸い一〇〇グラムの増食を受けたとしても、とても栄養のバランスがとれるものではない。ドイツ人や古参の囚人はちゃんとそれを計算し、減食になる以上は決して動かなかった。増食の褒賞を得て一時の腹を喜ぶために汗を流した中国人、朝鮮人で遂に栄養失調になった者を多数見た。

膨大な囚人を投入し永年努力して来たこの付近の開拓はかなり進行したところもあり、秋になるとかなりの収穫を挙げていた。駆け足でやって来る冬に備え

て、収穫を急がなければならぬときがある。

「今日の作業は農場行き」と発表になるとバラックにどよめき上がる。ニンジン、キャベツ、ジャガイモの収穫になると希望者が殺到する。作業場で食べられるからである。もちろん炊きできるわけではないが、生で腹に詰め込める。

一番人気のある作業はニンジン収穫であった。じかに食べるし、非常にうまい。水はないから洗えるわけではないが、ポロの綿入れで泥をぬぐって頬張ることは黙認されていた。山と積まれた集荷のニンジンであるが、バラックに持ち帰るとなると技術は大変である。背中にかくまう者、服にはさむ者、腰に巻きつける者、帽子の中に忍ばせてかぶるもの、あらゆる英知をしぼるのだが、バラックに入るときの衛門の身体検査で成功することは少なかった。

ジャガイモはどうしても生のままでは食べられない。煮くていかに空き腹でも受け付けてはくれない。ところが、大根おろしのように作ったブリキですりおろして水分を脱き取って団子に作ったものは利用価値

大である。熱いスープに入れると澱粉質がドロリとなり、塩湯スープが豪華なものに変わる。団子を房のペチカで焼けばさらによい。衛門の身体検査でも、団子を平らにして腹に巻きつけければ、ブグブグの綿入れの服の上からさすただけでは案外わからないから成功率は高かった。しかし大流行したので身体検査が一層厳重になってしまったので、一策を案じた満人の愛称「王ちゃん」は、靴の底に敷いて履いてきた。ドタドタの靴だからかなりのものが入る。衛兵も靴まで脱がせて検査はしなかったのである。泥と汗にこびりついた靴の中のごれ等、王ちゃんは問題にできなかった。

似顔絵

哀れな楽しみを与えてくれた農場行きの収穫作業の期は短い。革命記念日の十一月八日を境にしたように気温はぐんぐん下がりに、初冬なのに、零下一五度、一六度の日が続く。その頃になって、作業率を上げて一〇〇グラムのパンを得る馬鹿馬鹿しいことも分かった。私達も減食処分を免れるすれすれの仕事を続けた。腹は空き、被服の支給は全然なく、逮捕された

ときの服もボロボロになり、迫り来る寒さに震える毎日だった。

ソ連の囚人は一カ月一度の家庭通信が許されていた。文盲の多い囚人は、そのときになると代筆を頼んだり、鉛筆を借りるのに大きすぎだった。特権階級の連中は「元気でいる」と書くだけではもの足りなかった。せめて元気な姿を家族に見せてやりたいが、もちろん写真を撮るわけにはいかない。

私はそれに目をつけた。似顔絵を描くことである。少しばかり絵心があり、似た顔くらいは描けるのでポスターに描いてやったら大きなパンをお礼にくれた。それが評判になって大いに稼いだのも、悲惨な暮らしの中で楽しい思い出に残っている。衛兵の間でも話題になったとみえ、官舎に連れられて息子の顔を描いたこともあったが、これは一度しか機会に恵まれなかった。

大失敗したこともある。ポスターを描けというのだ、作業意欲高揚のポスターである。毎朝のように作業サボをするため、医務室の前に立ち並ぶ仮病患者抑

制をするものであった。私はこのポスターに、骸骨のような囚人を診察しているドクトルの顔を大きく描いた。このラーゲリのドクトルは桁外れに大きな鼻をたくわえ、どんぐり目をした、珍しい不細工な顔をしていた。私はその顔を一段と誇張して描き上げたから、たちまちドクトルの御機嫌を損じてしまったのである。それっきり私のポスター描きは首になってしまった。

首吊り未遂

厳寒の冬をどうにか生き耐えて三年目の春を迎えた。五月ともなればこの地にも野に花が咲き、渡り鳥が南の国から戻って来る。朝早くから私達の苦しみなど知らずに鳴く声が聞こえてくる。タンポポも花をつけ、アカザも新芽を見せていた。この草は私達の絶好の食料となって助けてくれた。ソ連人は草は食べないので私達だけのものになった。

この頃になると農作業も急に忙しくなる。土方専門の私達のラーゲリにも農場行きの作業が回って来るので非常に楽しみであった。えんどう畑の除草とジャガ

イモ畑の作業が一番嬉しかった。えんどうは花でも食べられるからだ。その花がなかなかうまい。そのまま食べても腹をこわすことはない。除草作業のあとが悪いと班長から叱られるが、花は食べてしまっても問題にならない。それは後刻ラーグリ側の作業監督が回って見ても、きれいに除草さえしてあれば花がなくなっても分らないからである。作業を終わったえんどう畑は、花のついていない畑が見事にでき上がってしまうのである。

ジャガイモ畑も見事に芽をふき、秋の収穫を約束して広々と広がっていた。このジャガイモ畑の除草作業も大変な魅力であった。秋の収穫時の生ジャガイモはとても食べられないが、芽を少し出した種イモはとてもうまい。草を取るふりをして種イモを掘り出し、土をぬぐい取りがぶりつくと、ちょうど長十郎梨のようである。水分をたっぷり含んで歯ざわりもサクサクと乙な味である。イモ畑こそ災難である。表面から見た畑はきれいに除草され、生え伸びた芽は青々として、作業が終わる夕方までは見事な畑になっているが、明

日、日が上がったなら、所々しおれた畑になってしまふであらう。そんなことは凡人の我々には関係がない。明日はまた別の作業場に引かれていくのが例だから、後で追及されたためしはなかった。

こんな暮らしはどんなに若い者でも限界がある。夏を越した頃には、あんなにうまいと思つた黒パンも次第にまずいものになってきた。下痢が続ぎ、土工作業のスコップにも力が入らなくなつてしまった。あと七年間の刑期に耐えることはとてもできまいと考えるようになった。私の帰国を一日千秋の思いでじつと待ちわびている妻のことを思うと、一言も言い伝えることなしに野垂れ死にするにはあまりにも口惜しいが、今となつては万策尽きたのだ。

体が弱つてくると思考力もすっかり失つていた。ただ一度でもよいから腹いっぱい食べ、好きな煙草を存分に喫つてみたいという動物的欲望が先に立っていた。これ以上の苦しみはなめたくない、この辺であきらめた方が幸福だろうと考えた。あの世とやらあるならば、この世において自覚する罪がないと確信してい

る私は、閻魔大王の裁きを受けても二度とラーゲリに送られることなどあるまいと信じた。

ついに自殺を決意した。逮捕以来一度も別れたことのなかった尾形部長に、バラックの軒下で夕食のパンを食べながらそれとなく別れを告げた。部長も私と同じように、いやそれ以上に弱っていた。部長は強くたしなめ激励はしてくれたが、私は翻意する気にはなれなかった。

今生の別れに最後の願いは、腹いっぱいパンを食うことと煙草を存分に喫うことであつた。私は身につけていたシャツ、外套でそれを求めた。それらは既に見るかげもなくよごれ破れてはいたが、ここでは一、二日分のパンやヤニ煙草の二袋くらいは値打ちはあつた。衣類は秋風が吹き始めた頃だったから商品価値は上がった。

その翌日、医者を拜み倒して作業休をせしめ、作業に出払っていたバラックの片隅で念願のパンを存分に食べ、しりから煙が出るほど満喫した楽しい日もたちまち夕方になった。ボロきれをなつて縄を作り、首吊

りの準備をした。バラックは人間がいっぱいだから、まさか人前では首吊りはできない。さればといって屋外は望楼の監視兵が終夜照明灯を照らして監視しているから、人けのない軒下でもそれは無理である。

考えついたので滅菌小舎である。バラックの裏手に土まじゅうのペチカ式の火力滅菌室があり、そこは誰もいないし、錠もかかっていない。しかも衣類をぶら下げる鉄の棒と頑丈な吊り金まであるのだ。ラーゲリでは虱の発生が最も恐れられていた。虱は発疹チフスの媒介となり、一度蔓延すればラーゲリは全滅し、大切な労働源を失ってしまうからだ。ソ連ではこの苦い経験を繰り返してきたから虱退治は徹底している。二週間に一度は全員の衣服をここで滅菌消毒することになっていた。決行は昼の疲れで皆寝込んだ十二時頃とした。

最後の床に入った。三十五年間の人生が走馬灯のように頭を駆けめぐる。生まれ故郷の山や川、貧乏百姓の末っ子でありながら、金持ちの息子しか入学できない中学校に入れてもらったこと、昭和初期の不況のど

ん底時代に四十倍の志願者の中から樺太庁巡查採用試験に合格採用されたこと、それに感激して努力した甲斐あって、同期生のトップで十二年目でただ一人、警部の肩章をつけることができた幸運が、急転直下戦犯第一号になってしまった数奇な運命を顧みて、思い出される数々の事が一度に脳裏を駆けめぐる。口惜し涙がとめどなく頬を伝って流れ出る。それよりも、終戦の詔勅を聞いたその翌日、引揚者でこつた返しの豊原駅頭で、「すぐ帰るから」とさりげなく別れた、リュックサック一つ背負った妻の姿が目の前にちらついで、なかなか眠れなかった。

一切合財終わったのだと覚悟は決めたものの、まだ生き延びたいという生の本能はどこかにひそんではいた。そのうち思い出は、夢の中に溶け込んでしまったのである。はっと目が覚めたときは東の空が白みかけていた。しばらくぶりで満腹した心地よさですっかり寝込んでしまったのである。がばっと起き上がり、滅菌小舎に走り入った。六畳敷ほどの土間の天井に鉄の棒が六本渡してある。この鉄棒に衣類をごつい針金で

吊るして、ペチカの高温で虱退治をする仕掛けになっている。用意の縄を鉄棒に結びつけた。妻に先立つことを詫び、近親縁者に謝礼と多幸を祈り合掌した。傍花と頬を伝う口惜し涙もぬぐい取らずに首に縄をしっかり結びつけた。ぶら下がったところ、背の高い私の足は土間についてしまった。たとえ足が地についても縊死はできるものだが、いっぺんにぐっと下がれないので首に巻きついた縄が非常に痛い。苦痛なしに死ぬには足の届かない高所が必要なのだ。首の吊り直しをした。鉄棒より高い天井の一番高い梁に縄を結ぶため踏み台になる箱を見つけてこようと外に出てみたら、夜もすっかり明けてしまい、空腹で朝食を待ちかねていた四人がぼつぼつ外に出て、入ってはならない滅菌室の前をうろついている私を見ていた。こうなれば望楼の監視兵も私の行動を見つけ出したようだった。

かくして私の首吊りは中止のやむなきに至った次第である。生きる、死ぬるの問題についての考え方は、思考力が既に異常な状態になったときとはいえ、生も死も共に生やさしいものではない。生きると言い切っ

ても必ずしも生きられるものではないと同じように、死を口にし決意したとしても、自らは容易に死ぬるものではなかった。

入院

さあそれからが大変である。一切のものをパンと煙草に替えて丸裸同様になってしまった私は、更に一層の苦しみをなめなければならなかった。私の体力は自殺不成功を境にぐんぐん低下していった。ノルマすれすれの作業さえ命がけであった。力が抜けてしまったのである。どんなに努力してもスコップの土をはねることはできなくなった。裏急後重の状態になったのである。下痢で便所に行っても、すぐまた便意を催す症状である。立派な栄養失調の症状となってしまったのだ。秋口の十月初旬になって遂に動くことができなくなってしまうた。

衛生兵上がりの医者も、重症と診たのであろう。私を病院に運ぶ手続をしてくれた。しかし栄養失調の末期症状である水ぶくれにはなっていなかったの、まだ運命の神は見捨てていなかった。病院に運び込まれ

た。既にまともな意識を失っていた私は、その前後のことは今、思い出すことはできない。

ラーゲリから数百メートル離れた小高い丘の麓に、病人を収容する病院と称する平家建ての土饅頭のような建物が鉄条網に囲まれて二棟並んでいる。もちろん文明社会の病院と言える施設ではない。ラーゲリと同様、土れんが（サマン）で造った小舎で、内部は土間にじかに丸太の支柱を差し込み、その上に板を渡してベッドのように造った寝台が五、六十個並べてある。

一号棟には栄養失調患者、外傷患者が横たわり、向かいの二号棟は結核と梅毒などの伝染病系の患者が寝ていた。医師の勤務する診療室が一号棟の入り口に一部屋区切っていた。戸棚に薬瓶がわずかばかり並べてあるのが病人を診療するところだという姿をしていた。

寝台には、さすがに乾草入りの布団を敷いてあり、木綿の分厚い毛布一枚ずつあてがわれていた。三年間着ていたポロ服を脱がされ、その代わりに白いシャツ、股下を貸与された。逮捕されて初めての被服の貸

与である。栄養失調患者はすべて無塩食で、毎食後丸薬一つずつと、寝ることが唯一の治療手段となっていた。栄養失調は急に食することは死につながってしまった。栄養失調は急に食することは死につながってしまった。初めて、労働のない、食事の配給に行列をつくる必要もない立場になり、むさぼるように眠った。存分に眠った。

私が運ばれて、一足先に入院していた樺太憲兵隊長だった白浜中佐、北鮮で捕らえられたと言っていた朝鮮総督府の大塚警部は、既に栄養失調で足の裏側までむくんでしまい、私が入院して間もなく、ろうそくの火が消えるようにあの世に旅立ってしまった。白浜中佐は豊原刑務所以来ずっと一緒に、同じ房、同じストリユーピンで運ばれて来た数多い戦犯の一人であった。

ここに勤務する医師は女医一人だけであった。この女医はウラジオストク生まれの朝鮮系ソ連人で、例の五十八条で十年の刑を受け、刑期を勤め上げ出獄したが、居住制限となった、いわゆる半自由人だった。今でも忘れない、名前はレードアンドレーナと呼ばれ

る三十七、八のすらりとした女だった。ソ連生まれだから、れっきとしたソ連国籍で、朝鮮語を口にしたことは一度も聞かなかったが、黒い長い髪、朝鮮人によくある鼻の低い偏平な、うりざね顔だったが、どこかきりとした男まさりの顔だちをしていた。収容されている病人は、近くに点在する農業ラーゲリから送られて来る栄養失調患者が大部分で、これもソ連人、カザック系おり、ドイツ人、オーストリア、満人といった人種の展示場のようなだったが、彼女は何となく黄色の東洋人に親切のように見えた。私はこの女医に助けられたのである。

この病院の食料は三五〇グラムの黒パンに、ちょっと程度のよいイモの入ったスープと、昼に雑穀の粥、それに少量のバター、極少量の砂糖という具合に、さすがに病人食らしい細かい配慮はしていた。しかし何分にも絶対量が少ない。体の快復するにつれ、空腹はつきまとう。でも、おかげで一カ月ほどで見違えるほど元気を取り戻すことができた。患者は約一五〇人も収容されていたろうか、ほとんどは栄養不良、

栄養失調で、難しい病人はここから四〇五〇キロ北にあるカラカンダ収容所内の大きな病院に送られると聞いた。しかし、ここで死亡する者はなかなか多く、一週間に一人くらいは必ず運び出されていた。入院患者の回復率は極めて早く、十日くらいでほとんど元のラーゲリに戻され、代わりの骨と皮の囚人が運び込まれベッドが空いていることはまずなかった。

一カ月目に医務室に呼び出された。ああ、またラーゲリに逆戻りかと思ったら、意外にも病院の炊事で働けという。片言のロシア語しか分からない私は自分の耳を疑った。ラーゲリの炊事勤務は、団長（コメンダント）、作業班長（ブルガシル）、医務室勤務者の三者をラーゲリの三長官といわれ、特権階級囚人の独占的職場で、五十八条組はまず見込みのない働き場である。ましてや病院の炊事場勤務ときは、まさに破天荒というところであった。この機会を逃してはなるものかと、その日から全力を挙げて働いた。掃除、食器洗い、イモの皮むき、水汲み、食事の運搬と、コマネズミのように動いたので、女炊事長のフローシヤに

すっかり気に入られたのである。

配給のパンは炊事勤務といえども、一グラムも余分ということはできないが、スープやイモは、その場では食べられるだけ食べることが役得として黙認されていた。掃除といっても、しゃばでやるようなものとはいささか趣が違う。それは、十五坪くらいある炊事場の土間を一面に牛糞を水で薄めた泥で丁寧に塗り、乾いたころ合いを見てぼろきれで静かに磨き上げるのである。これにはなかなか技術が必要である。農場ラーゲリが近くにあるから排泄したばかりの牛糞はふんだんにある。新しいものはちっとも臭くない。空気が非常に乾燥している地域なのですぐ乾き、ピカラッカーを塗ったように光沢さえ出て立派なものに変わるのだ。最後に壁ぎわやパン切り台、ペチカの周囲の要所要所に石灰を塗って真っ白に区切りをつけて、見た目にはなかなか立派な部屋となるのである。正に生活の知恵である。それを毎朝、陽の昇る前に仕上げるのが私の主要な仕事であった。

ソ連は泥棒が非常に多い国で、厳格な計画経済の国

であり、無理なぎりぎりの統制の下に暮らさねばならぬ反面の弊害現象として、配給物資の横流し、横取りは日常茶飯事のこと、これはラーゲリもしゃばも変わりはない。これを防止するため敵罰をもって臨み、それを摘発する手段として密告が称揚され、その組織が網の目のように張りめぐらされている。

ソ連の秘密警察は、革命以来、絶大な功績を残している。革命達成のためには手段を選ばずに残酷、非道な粛清の繰り返しの歴史に活躍したのがこの秘密警察組織である。この膨大な組織のもとに密偵が暗躍し、反対分子、不平分子、邪魔者を抹殺し、あるいは資源開発の最も安価な労働源を得るのに事欠かなかった。密偵なるものは、職業的な者よりはただの市井の国民で、経済的、社会的あるいは人間的欲望の機微を巧みにとらえて、欺瞞と恫喝をもって密偵の役を背負わされた、おびたしい者が、どこかの職場にも、いずれの組織の中にも、うろついていた。

ラーゲリ内の底流も変わりはない。病院の幹部は、ろくにロシア語を知らない、悪事はやらない日本人を

使っておれば、彼らは安心して病人の配給物資の頭へネもまた横流しも、獄吏に袖の下を使えるから安泰といたところが私の炊事場働きになったところのようだった。

私をかわいがってくれたこの女炊事長フローシヤは、五十の坂をちょっと越したばかりのデブデブのソ連人で、今度の大戦で独軍に一時占領されたレニングラード近くの国営農場の任人だった。怒涛のごとく押し寄せた独軍の進撃に逃げることもできず、占領された後もそこに居座って、ドイツ軍の支配下に農場で働いていたらしい。ところが、独軍が撃退された後、居残った者は根こそぎ、独軍に協力した事由のもとに、例の反逆罪の五十八条により処罰された者の一人で、彼女は七年の矯正労働刑と言っていた。素晴らしい料理の腕前の持ち主で、材料さえあればケーキでも何でも作るので、獄吏はしきりに彼女を利用していった。五十八条では珍しく刑期が短いのと料理がうまいので、五十八条組でも炊事長として働いていたようだった。

私がそこに行つて四カ月目の朝、突然衛兵から呼出

しがあり釈放だと言われた彼女は、げげんな顔をしながらも、さすがに嬉しそうだ。まだ刑期が三年もあるのに意外と思っただからである。とにかく皆に祝福されて手を振り、獄吏に引かれて衛門を出て行った。

ところがどうでしょう、二カ月後再び衛門に現れたではないか。姿はと見ると、あんなに太っていたデブ姿はなく、わずか二カ月なのにすっかりスマートになった、しわだらけの婆さんになっていた。

カラカンダの大監獄で再裁判があり、刑期を更に十年もらったのである。四年前に七年の刑を受けた被占領当時の独軍への協力行為は、七年では軽過ぎたからもう十年増加したのだった。モスクワからの判決修正命令、政策の変更によって極めて自在に輕易に行われるのが、この国の世界にさんと輝く制度の特質であったのだ。

こうした事例は、ハバロフスクでも、昭和二十三年当時判決を受けた日本人の戦犯？が、昭和二十八年頃になって十年刑から二十五年に変更判決を受けた事例は数多く見た。たしか私の同僚、教賀武も中山得三も

(前者は特高課、後者は上敷香勤務) そうだったと記憶している。一事不再理の原則などという法理は、この国には通用しないのだ。法治国とは、法に行政の基礎を置き、行政によって法の領域を侵さない仕組みの国であるはずなのに、法常識も法の権威もあつたものではない。

彼女は憤激と悲嘆にすっかり憔悴していた。もとのラーゲリ、特に同じ病院に戻るなどということは珍しいことであるのだが、それには女医アンドレーナの大変な力添えがあつたようだった。再び炊事長になつたわけだが、二人は悲痛の涙を流して、夕方になるとしばしば長い時間話し込んでいた。恐らく、この国に生まれてしまったやるせない悲運を慰め合つていたのでろう。

この病院にも定期的に上部機関の監察がある。二カ月ごとにカラカンダの本院からぞろぞろと監察官がやって来る。その予定日が決まると院内は大騒ぎである。勤務医も下働きの者はもちろん、患者も恐々である。病院の運営状況を子細に点検するほかに、監察官

による患者全員の身体検査が実施されるからである。この身体検査は病状の診断ではなく重労働に堪えるかどうか、即ち鉱山地帯、北氷洋行き要員を選別するのだから、患者達は身振りよろしく監察官に哀訴懇願する光景が展開する。

私も遂に重労働可能に判定される運命になってしまった。入院してちょうど六カ月目の、解氷も間近になった三月の末であった。この監察官の前には女医リードアンドレーナも全く無力であった。幸い私は北氷洋行きとはならず、もとのラーゲリに戻されたが、労働はどこまでもつきまとい続けた。また、イモとスープで太った私の体は一、二カ月でたちまち骨皮に逆戻りして、また入院するということを三度も繰り返した。その都度リードアンドレーナの口添えがあったと聞いた。

昭和二十五年、帰国（ダモイ）だと言われ、尾形部長達と十余人の日本人と一緒にこの地を後にしたのは四月初旬の雪解けの季だった。例のストリユーピン列車に入れられて、長い日数をかけてハバロフスクの

ラーゲリに収容され、初めて日本人だけの暮らしとなったのである。そこには三〇〇〇人くらいの日本人が集まっていたらうか、私達が到着して数日後、一〇〇〇人くらいは確かに帰国梯団になって出発したが、私達戦犯者は残留組となる。間もなくイズベスチャ紙に「日本人捕虜の帰国は完了した。残余はソ国に対して重大な犯罪行為を犯した戦犯だけである」と発表された。朝鮮戦争勃発も聞いて聞いた。残された私達二五〇〇人の戦犯は、さらに五年の間、ハバロフスクで過酷な労働にさいなまれなければならなかったのである。

ハバロフスクの生活は既に多数の人達によって詳しく伝えられているので、ここでは書かないが、昭和三十年十二月二十五日、病をおして命がけで交渉してくれた鳩山首相の努力、全国民挙げての救助活動のおかげで舞鶴に上陸できたのは、とてもとても忘れることのできない感激であった。そして七年間も消息不明、音信なしの私を、自らも五年もの長い間の闘病生活に耐え、じっと待っていてくれた病み上がりの妻と、十

一年目で再会できたのである。

あとがき

今度の戦争では全国民、皆ひどい目に遭った。私は十一年もソ連の監獄に入ったからといって、私だけがひどかったとは決して思っていない。むしろ分相応に試験に遭ったのだとさえ思っている。ソ連に捕虜となった軍人、民間人、実に七十余万人。そして、とんでもない難癖をつけられて戦犯にされてしまった者三五〇〇余人。それよりも、長期にわたって酷使されたうえ、帰国を夢見ながら遂に極寒のかの地で命を落とした二〇万といわれる同胞を思うと、悲憤の涙を禁じ得ない。五体満足で帰国できた私は最高の幸せ者である。

帰国後すぐ私は、「十一年も、しかも青春のすべてを無駄にしたのだ、これを何とする」と閻魔大王に強訴した。これを聞いた大王は、「もっともである、無駄にした十一年を倍にしてしゃばにいてもよいぞ」と敵かに言ってくれた。だから私は、平均寿命よりも二十余年は生き永らえる権利を得たものと思っている。

身体の自由、言論の自由、居住移転の自由、信教の自由等々、これら人間としての基本的な自由を国民の権利と認め国家の力によって保障してくれることを、どこの国の憲法にも最も大切なことと明記されている。ソ連憲法も同様である。この権利を確保されて初めて幸せな人間社会が生まれるわけで、金持ちだとか貧乏だとか、美しいとか、臭いとかは、次に生ずる人間らしさの営みからできるものと思う。ところが、それらの権利自由を護り保障してくれるはずの国家が自ら踏みこじる国だとしたら、国民はどういうことになるだろうか。紙に書いた憲法や宣伝文書に自由を謳歌しても、それは絵に描いた餅である。私は自由の大切なことを骨身にこたえて体験し、かつ見聞した。

「ダモイ」

昭和三十年十二月二十五日、救い出されてソ連からの第五次引揚者の一人になって舞鶴に上陸した。毎晩のように夢に見た日本の山、川、あんなに美しいと思っただことはなかった。

引揚援護局の係員から新しい軍隊毛布五枚と引揚見

舞金一万円をもらった。ほんとにありがたかった。折り目のない千円札十枚、これだけあれば当分は食べられると計算した。ところが街に出てパットを買って一個三十円也の値段を聞いて、何かの間違いでないかと思った。私の頭には一箱十銭の金鶏きんせししか頭になかったのである。今様、浦島太郎であった。これではすぐに働かねば生きていけない。生まれ故郷の庄内鶴岡に帰る早々、働きの口を探すことにした。

舞鶴に上陸したとき、外務省の係員に、「あなたは、まだ樺太庁警部の地位は継続しているが、引揚げと同時に退職してもらうことになっている」と説明を受け、指示どおり、その場で外務大臣重光葵宛に辞職願を書いたけれども、いわば国の犠牲になったのだから復職は容易だろうと軽く考えていた。

年の暮れも迫った十二月二十八日だったかと思う、私は山形県警察本部を訪ね警務課長に復職を願ひ出した。時代は変わって昔の地位での復職は思いもよらないことを察した私は、巡査の振り出しから再出発すると懇願したのに、「本県は現在定員いっぱいである」と

ころ欠員はない。岩手県では今、欠員があるらしいから、そちらに運動したら」と警務課長と同席していた次席の小笠原警部が親切に教えてくれた。門前払いである。ああ、そういうものかとあきらめた。

永年の間、いためつけられた私の体は普通ではなかった。血圧が最高二〇〇ミリもあって、舞鶴に上陸、郷土入りの途中、東京まで来たとき気分が悪くなってしまい、治療を受けたため東京に二日滞在したので、山形県で組んでくれた帰郷の日程を変更した。これを郷土の新聞が詳しく報道していたので、警察部はこれをよく承知していたのだろう。こんな病人を抱え込んだら荷物だと思ったのかもしれない。重い足を引きずって生まれ故郷庄内の山、金峯山の麓に立った私の姿である。

山形の市内には昔の同僚が数人引き揚げていた。運よく抑留を免れた小松千秋氏、松田節郎氏、シベリアへは送られて散々苦労したが、職場の関係で戦犯にならずに一足先に帰還した近野豊蔵氏等が、私の帰還を祝って早速駆けつけてくれた。彼らはそれぞれ調査

庁、県庁、公安調査庁に就職していた。終戦後の同僚の消息、世相の変遷、混乱の実相を話してくれた。

想像はしていたものの、あまりの厳しい変わりように驚くことばかり、変わらないものは故郷の山と川だけの感を深くした。山形県警の態度が冷たいと思うのは身勝手なことだった。戦争の傷は深く、ようやく復興の緒についたばかりの状態であり、私の受けた処遇は、当たり前といえ、当たり前前で、引揚者が一様に味わなければならない苦しみであった。

何はともあれ、これから生きる途を探さねばならぬとあって、友はその席から早速、当時陸上自衛隊第六管区総監になっていた栗山松一氏に電話で頼み込んでくれた。

栗山総監とのふれあい

栗山さんは樺太時代の私の直接の上司である。氏は昭和十二年、当時の樺太庁長官今村武志の特別の招聘により、北海道警察部から迎えられた、つとに逸材の誉が高かった新官僚であった。豊原警察署長を振り出しに、一年余にしてたちまち警察部警務課長になり、

樺太警察の人事、予算を掌握する実質上の警察の最高責任者となった。

当時こう着した支那事変はますます重大な時局に転じ、警察の任務はいよいよ重きを加えていった。一般的な治安の維持はもちろんのこと、食糧、衣料、住宅、防空、労働とあらゆる国民生活にわたり、警察組織の活動が期待されるようになってきた。これに対処する警察の施策は大変なものだった。

氏は、特高課員だった私にとって、いわば兼務時代の上司だった。終戦のときは、敷香支庁長に栄進しており、我が国最北のソ連に境する地において行政の最高責任の要職にあったが、それがソ連進駐直後は戦犯容疑者としてソ連軍に逮捕されることになり、私が収容された豊原刑務所の独房第十九号室に、私が隣室の雑居房に移された直後に、奇しくも後任の囚人となって収容されたのも、氏とは何かの因縁があるようにさえ思っている。

投獄された氏は、一足先に捕らわれた大津長官、終戦時第一経済部長であった氏の前任警察部長の白井八

州雄氏等二十五人とともに間もなく未決のままシベリアに送られたが、僥倖にも、戦犯の容疑なしとして二年後、全員帰還することができたのである。しかし、終戦にやっと間に合うように、大阪府警察本部の警務課長から樺太の最後の警察部長に任命されて、終戦の五カ月前に駆けつけた尾形雅邦（旧名 半）氏が、樺太警察の一切の責任を背負わされて十五年の刑を受けることになるとは、運命はまことに皮肉なものである。

樺太は、東条内閣時代の行政改革により、内務省管下になり、内地並みの行政組織の形になったが、実質は拓務省管下時代のままの権限行使が経過規程としてとられていた。即ち警察の活動は、長官を頂点とし、その具体的指揮は警察部長であり、我々はその手足、否指先に過ぎなかったのである。

もしも警察の活動が、ソ連の言うごとく資本主義援助の犯罪行為とするならば、その根源を追究しないのは常識ではちょっと判断しかねた。

もっとも私達は、少なくとも累を上司、同僚に及ぼ

すことあってはならぬと命かけて努めたけれども、しよせんソ連の戦犯は、まことにいいかげんなものであった。

防衛庁事務官

私が帰還した三十年の師走も駆け足で過ぎ去り、新しい年になった一月十日、一通の葉書が届いた。防衛庁事務官に採用するから、多賀城の第六管区総監部に出頭せよというものであった。引揚者の就職は極めて困難であったのに、こんなに早く職に恵まれようとは思ってもよらなかった。その喜びはとも忘れることはできない。

防衛庁事務官になることは大変な制約があった。年齢、学力、体力等々細々と条件が定められ、任免権を持つている総監といえども勝手に採用できない仕組みになっており、当時の私はその条件を満たす人間ではなかったのである。防衛庁事務官になって、後日、隊員の採用業務を専門に担当することになった私は、私の採用になった経緯の文書を見る機会があり、栗山さんの配慮を知ることができてからは、一層彼に対する

感謝の念を深くした。

自衛隊は文民統制がたてまえて、私服組が制服組に優位の立場にある組織になっているが、これは中央の内局のことで、第一線の部隊では、まるで違っていた。事務官は名のごとく事務に従事することになっており、常に制服組の陰で立ち働くのが任務で、旧軍時代の軍属にも似て、その仕事の範囲も狭小であった。

まだ意欲があった私には物足りない感があった。しかし、その反面、すべての面において余裕があったのがかえって幸いであった。この物足りない気持ちを経験によって満たそうとする気になり、熱を上げる機運になったのは、これまた塞翁が馬と言うべきか。

私が自衛隊に入って二年目に栗山さんは定年になり、総監の職を去ることになった。第六管区隊を創設し、自ら初代総監となって丸四年、自衛隊に風当たりの強い世相の中で確固たる防衛の基盤を創り上げた氏の業績は偉大なものがあった。歴史の浅い当時の自衛隊は、根っからの自衛隊育ちは一人もなく、第二、第三の人生を求めて入った者達が大部分で、旧軍から、

警察畑から、他官庁から、民間会社からといったように、前歴は千差万別の寄せ集め世帯であった。

その中で信望を一身に集め、心から惜しまれて自衛隊を去っていった離隊式の前後の状況は劇的そのもので、数千の隊員の一人一人の心深く永遠に焼きつけるものがあった。人徳というものは崇高なものである。

膨大な組織となった自衛隊からは、年間万を超す除隊者を数える。まだまだ血気盛りである。この人達を法によって「はい、さようなら」と衛門を出たとたんに防衛に対する傍観者にしてしまうとあつては、国家的損失であるばかりでなく、現職にある隊員の士気に極めて影響が大きく、将来の発展が望めない。

氏はこの辺のところを解決する方策を腐心し、かねてから、氏を自衛隊に招いた防衛庁長官木村篤太郎氏、自衛隊の前身である警察予備隊の本部長であった増原恵吉氏等と図って、自衛隊退職者をもって組織する隊友会を創ることに決意せしめたのである。隊友会は昔の在郷軍人会と一脈相通する組織ではあるが、何一つ国家の支援保護がある訳ではなく、全く自前の同

志的結合体にすぎなかった。氏は退官と同時に東北全域を包含する組織の長に推されたが、陣痛の期間は長かった。私も自衛隊にあって、こうした方面の仕事の一部分を担っていた関係から、一段と密接に氏の指導を受けるようになったのである。

隊友会は今でこそ全国組織が確立し、各県に支部があり、十余万の会員を擁する強力な団体に発展し、自衛隊と一体になって活動を展開しているが、氏の余生を挙げての尽力が実を結んだものである。

氏は元来、理財に関心が薄く、蓄財の機会はいつも避けて通った清廉の士であった。しかし、いかに高潔の士であっても霞を食って生きることのできる仙人ではなかったたので、生活のためもあって、三菱系の菊谷工業という個人会社に重役として迎えられた。これも氏が慕う社主のたつての願いを受け入れたものであった。

その会社は私の勤務する東北方面総監部に隣接していたので、私はずっとうるさいくらい訪ねては指導を願っていたが、私が絵に強い興味を持つていることを

知っていた氏は、本格的に取り組むことを勧めてくれた。氏の芸術に対する深い識見に刺激されているうち、いつの間にか、その気になったのは、今考えると夢のようである。

私は余暇のすべてを投入して描き続けた絵を持って会社にあるいは私宅を訪れ、見てもらうことを最大の楽しみにした日が長いこと続いた。

氏の幅広い社会活動には芸術界の知名人の交友も多数あった。その中の画家、創元会の沼倉正見、日本水彩画会の平嶋武夫両画伯に引き合わせてもらうことになり、私はその後、平嶋画伯に正式に入門師事することとなり、今もって絵に明け暮れることになった。

昭和五十三年春、連続十三回入選した日本水彩画会展で、お情けで同会の会友に推挙された私を一番喜んでくれたのは栗山さんであった。「人生は出会いなり」という。よき指導者にめぐり会うこと、そしてこれを大切にすることが、その人の人生を創り上げてくれるものであると信じている。

思えば、樺太で特高課員として課長として仕えて以

来実に三十余年、私の人生には、いつも、陰になり日向となつての栗山さんの庇護があつた。樺太の警察官千余人のうち、かくも永く懇切な指導を受け続けた私は最高の果報者と言わねばならない。